ふくいミュージアム

1985. 3. 1
No. 7

福井県立博物館

能面 筋怪士（すじあやかし）

P.5参照

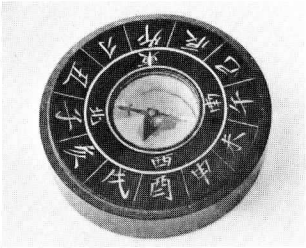
博物館60年度の特別展

○春季特別展　「北前船と越前・若狭」

昭和60年4月21日(日)～5月31日(金)

「北前船」というのは、江戸時代の中頃から明治時代中頃にかけて、蝦夷地（現在の北海道）と「天下の台所」といわれた大坂との間を往復した弁才（ベザイ）船と呼ばれる構造をもった船です。この北前船の特色は、ただ単に荷物を運搬して、その運賃をもって利益とするだけでなく、船主が、各湊で安く商品を買い集めて、それを別の湊で高く売りながら航海をするという「買積制」をとっていたことです。これによって、日本海沿岸各地の特産物が盛んに流通するようになったのです。当時の日本海沿岸各地の商品流通の大きな原動力であったといえるでしょう。

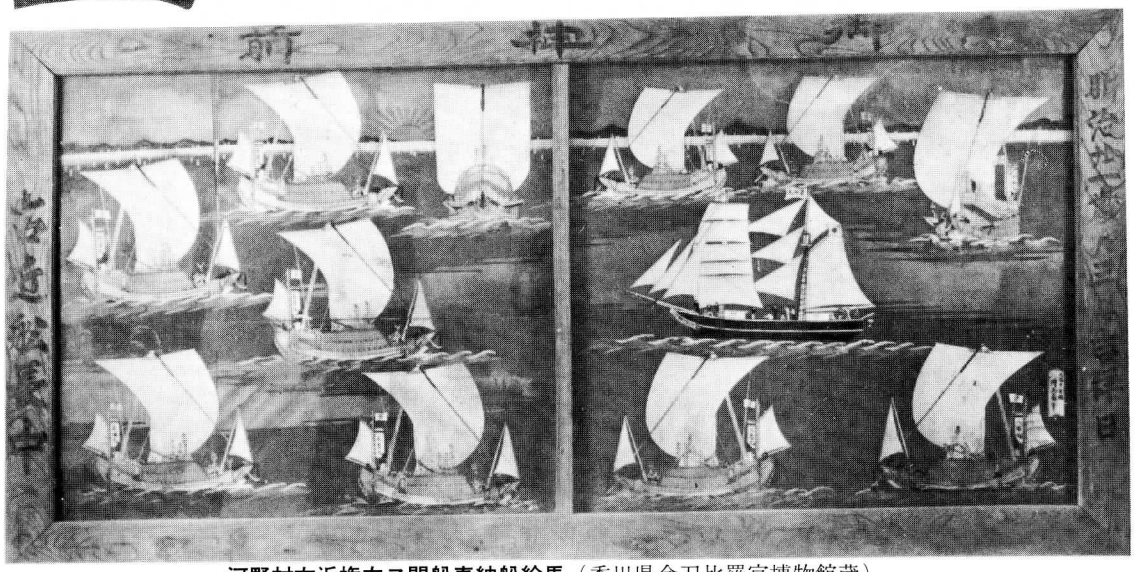
さて、この北前船と越前・若狭はどのような関係があったのでしょう。まず第一に、北前船の船主を多く輩出したのが、越前・若狭でした。三国湊の森田家や内田家、河野村の右近家や中村家、小浜の古河家などは、北前船の船主として巨万の富を築いた家として有名です。第二に、北前船の中継港として三国、敦賀、小浜といった港が当時では日本海側屈指の港として栄えました。第三に、各地から商品や文化が移入され、当時の越前・若狭に経済文化の両面に大きな影響を及ぼしたことです。以上のように、江戸時代中ごろから明治にかけての越前・若狭は、「北前船」とは切っても切れない関係にあったといえるでしょう。



そこで、この北前船について、

①北前船以前　②弁才船の構造と造船技術　③北前船の航海　④北前船の商活動　⑤海難と海上信仰　⑥北前船のもたらした文化

以上の6つのテーマ構成により、「北前船」とは何か、また、それがこの越前・若狭におよぼした影響とは何かを、県内はもとより、日本海沿岸各地から北前船に関する資料を一堂に集め、その解明を試みたいと思っています。



河野村右近権左ヱ門船奉納船絵馬（香川県金刀比羅宮博物館蔵）

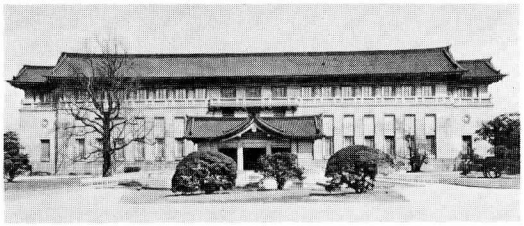
○東京国立博物館巡回展「日本の美」

昭和60年7月24日(水)～9月1日(火)

東京国立博物館(写真)は、言うまでもなく、戦前の帝室博物館の頃より、日本のみならず広く東洋諸地域の文化財の収集に務め、観覧に供してきたわが国第一級の博物館です。それはとりも直さず、わが国の美術の歴史が、他の諸地域との交流により影響を受けながら育くまれてきたと考えられるからです。このような考えを基本として収集された文化財は、それがタイトル名『日本の美』のように国内の美術に限る場合であっても、単なる概観に終ることなく、いやそれ以上に、わが国の美術のひろがりと内容の深さを理解できるものになると思います。

今回は縄文時代から江戸時代まで、各時代の特色ある文化財・美術品を100件以上展示する予定です。また、ひとつの分野にかたよることなく、多分野にわたり総合的な展示を行なえることも特徴といえます。

この機会に、大きな意味での日本の美術の流れとその豊かさを充分に鑑賞していただければ幸いです。

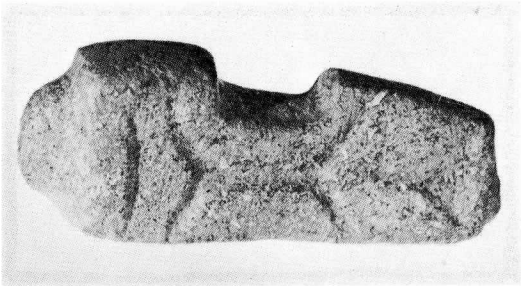


○秋季特別展「福井の埋蔵文化財展」(仮称)

昭和60年10月8日(火)～11月17日(日)

昭和40年代後半以降、県下における遺跡の発掘調査件数は著しく増加し、現在までに貴重な埋蔵文化財が数多く発見されました。それらの量と質は、福井県の歴史を再構成するのに十分なものでした。

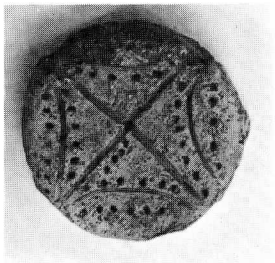
縄文時代のイメージを塗り変えた鳥浜貝塚、稲作の始まった弥生時代の生活を如実に示した吉河(よしこ)遺跡、北陸の古墳時代の様相について再考を促した手繰ヶ城(てぐりがじょう)山古墳や六呂瀬(ろくろせ)山1・2号墳、戦国城下町の繁栄をよみがえらせた一乗谷朝倉氏遺跡など枚挙にいとまがありません。

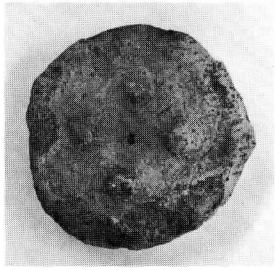


御物石器（勝山市上野遺跡出土）

しかし、これらの埋蔵文化財は、これまで一般に公開される機会がほとんどありませんでした。

これらの中から特に重要なものを一堂に展示して、県民の皆さんに歴史や埋蔵文化財に対する理解と関心を深めていただければと考えています。





耳栓（勝山市大渡遺跡出土）

○県立博物館　館蔵品展

昭和61年2月7日(金)～3月13日(木)

県立博物館の館蔵資料は、現在約4万点にものぼります。これらは、館独自の資料の購入や採集のほかに、県内外の方々の寄贈や寄託によるものも多く含んでいます。

この内約2,000点は、常設展示において観覧者の方々に御覧いただいていますが、大方の資料はいまだに公開されていません。

そこで本展観では、化石・考古・工芸・絵画・書籍等の館蔵品のうち資料的価値のより高いもの約50点を初公開し、十分に鑑賞していただくことによって、博物館の今後の資料収集活動に対する県民各位のより一層の御理解と御協力を得ようとするものです。

研究ノート

中新世チャートについて

チャートと呼ばれる岩石は、ち密な固い岩石で、しばしば石鏃などの石材として古代人の生活に活用された。チャートは、小さな石英の結晶が寄り集まってできており、成分の95%以上が二酸化ケイ素（SiO_2）の岩石である。一般的にチャートは、古生代・中生代のような古い時代にみられる岩石で、新生代のような比較的新しい時代のチャートはあまり知られていない。この研究ノートでは、丹生山地の新生代のチャートについて述べてみたい。

チャートが発見された周辺の地質　昭和49年、福井市鮎川付近で地質調査中に〝チャート〟と呼べそうな岩石を見つけた。ここは丹生山地の北部に位置し、丹生山地の地層群は、地層の下位から上位に向って、糸生累層（火山噴火による堆積物）・国見累層（扇状地～三角州の堆積物や内湾・浅海の堆積物）・川西累層（海底？の堆積物や火山噴火による堆積物）の三つの累層に分けられている。これらの地層は地質時代の新第三紀中新世（約2000万年～1000万年前）に堆積したもので、問題のチャートが挾まれているのは国見累層の中部あたりの三角州から内湾の環境に移り変わる付近である。（図１）。

チャートの産状　チャートは図１に示すように鍵層のK1凝灰岩とK2凝灰岩の間に見られる。この付近を追跡調査してみるとチャートの転石が広くみられ水平距離にして約５km以上の分布をしているものと推定できる。チャートが発見された崖の地層（図2）はレキ岩、砂岩、頁岩、シルト岩、炭質頁岩および凝灰岩が規則性をもって重なっているのがわかる。この規則性は「上方細粒化型サイクル」と呼ばれる小堆積サイクルで一般的に「河(川)性堆積物」の特徴である。さらに詳細に観察するとチャートは約30cmの厚さで、凝灰岩→炭質頁岩→チャート→炭質頁岩→チャート→凝灰岩の順に重なりあっている。(図３)。このチャートの重なり方は後で述べるこのチャートの出来方に意味をもってくる。

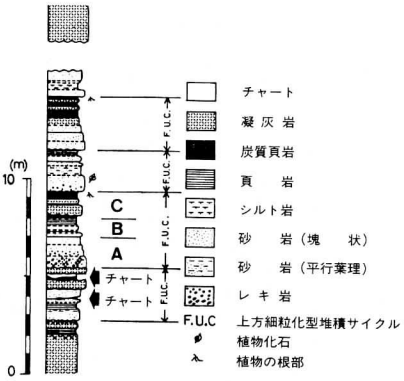


図2 チャートを産出する崖の柱状図
矢印の部分がチャート層

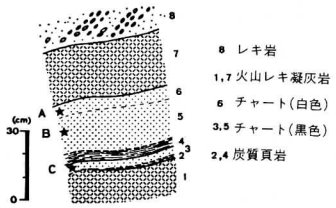


図3 チャート層のスケッチ(図2のチャートの部分)
星印は化学分析のサンプルを採取したところ

チャートの性質　崖から採集したチャートを薄く切断・研磨してスライドグラスにはりつけ光を透過させる試料(薄片)を作製して偏光顕微鏡で観察してみると、35μ以上の粗晶石英・35μ以下の微晶質石英・放射状に針状の石英を束ねた構造をもつ玉

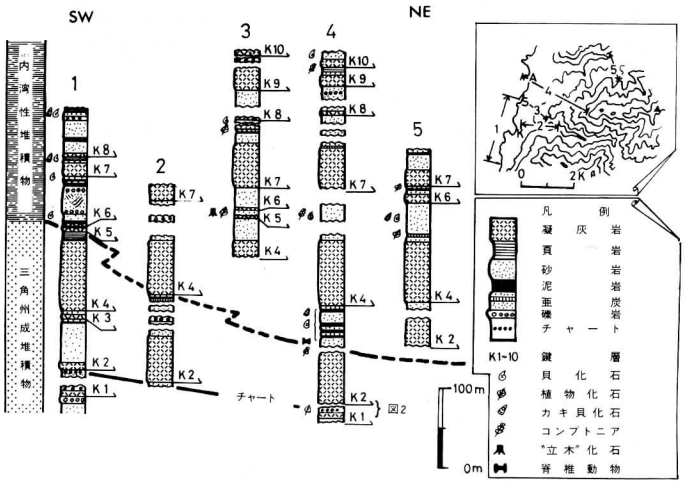


図1 鮎川付近の地質柱状図

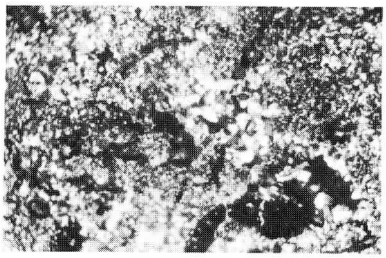


図4 中新生チャートの偏光顕微鏡写真

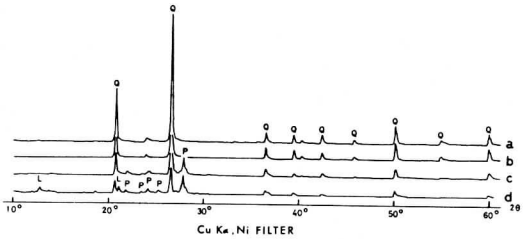


図5 丹生山地のチャートや凝灰岩のX線回折図
a：チャート　b：赤色チャート　c：チャート様岩石
d：凝灰岩　Q：石英　L：ローモンタイト

髄質石英と微量の不透明鉱物（鉄酸化物など）でできていることがわかる(図４)。またこのチャートを微粉末にしてX線回析分析を行ってみると、石英特有の回折曲線(図５)が得られチャートが石英でできていることが確認できた。さらに、このチャートの試料３つ(図３のA・B・C)について化学分析を行ったところSiO_2(二酸化ケイ素）が96%以上含まれていることが明らかになった。以上のようなこのチャートの岩石学的性質は、まさしく南条郡や嶺南にみられる中・古生代のチャートの性質と酷似しており、岩石学的にチャートと呼んでも良いことが明らかである。

ところで、チャートという岩石は普通中生代以前の古い地層中には良くみられる岩石だが、丹生山地のように新しい時代の地層（新生代）から発見された例があるのだろうかということが気がかりである。そこで、限られた文献ではあるが調べてみると、日本からは秋田県小坂鉱山や花岡鉱山からの黒鉱型鉱床に伴なう〝鉄石英(赤色チャートに似た岩石)〟、男鹿半島の中期中新世の硬質頁岩(女川層)や能登半島の珪藻泥岩中の珪質岩などがみられるがいずれもチャートとは呼べないものである。一方外国に例を求めると、アメリカ・カリフォルニア州のモンテレイのチャート(中期中新世)、ワイオミング州のチャート(第三紀)、アフリカ・ケニアにあるマガディ湖からのチャート(第四紀)、さらに深海底掘削計画によって深海底のボーリングによって得られたチャート（白亜紀）などが知られているが、新しい時代のチャートはきわめて限られた例と言える。

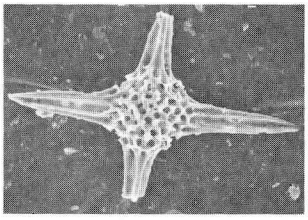


図6 放散虫(*Emilvia*(？)sp.)
今庄産

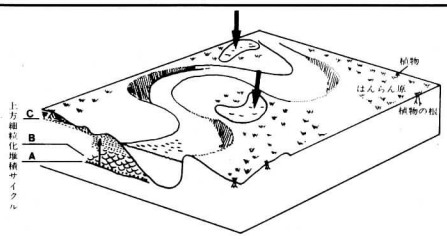


図7 丹生チャートの堆積した環境の推定図(R.G. Walker, 1979を簡略化)
矢印のような場所が可能性が高いと思われる。

チャートの形成過程　チャートのでき方について、古い時代のチャートについては、最近の走査型電子顕微鏡をつかった研究から大洋底～大陸棚のような海底でケイ質の殻をもつ放散虫（図６）のような微生物が集積してできたことが明らかになっている。では、丹生山地のチャートはどのようにしてできたのだろうか。まず、走査型電子顕微鏡でこのチャートの表面観察を試みたが放散虫は全く見られず古い時代のチャートのように生物起源ではないことがはっきりした。丹生のチャートのでき方を考える手がかりをチャートの産状に求めてみることにする。このチャートは丹生山地が海になる前の三角州のような環境であったことが図１や図２に示す事実からわかる。すなわちチャートを挾む地層にみられる上方細粒化型堆積サイクルは三角州頂部の河川性堆積物に特徴的にみられる現象であり、この小堆積サイクルの上部(Ｃ)にみられる炭質頁岩や植物根部の根跡などは、チャートが沼沢地ないし一時的な〝湖〟のような場所(図７)に堆積したものと推定される。さらにチャートが凝灰岩と密接な関係があることから、三角州表面の凝灰岩の上を流れ、SiO_2が高濃度になったと思われる河水が沼沢地や湖に滞水し、ここへ運ばれた植物の腐敗によって生じる有機酸によって河水のpHが変化し、SiO_2が〝沈澱〟してその後の〝続成作用〟によってチャートを形成したものと推論できる。最近、県立鯖江高校の水野閲映氏によって加越台地の中新世の地層からもチャートが発見された。その産状は全く丹生山地と同様であり、この研究によっても上述のチャートの形成過程が今後さらに確実なものになってゆくと考える。

参考文献

東洋一(1979) 福井県丹生山地より産出する中期中新世のチャート．地質学雑、**85**、２、59－66.

（東　洋一）

収蔵資料の紹介

須恵器 蔵骨器（ぞうこつき） 〈購入資料〉

奈良時代　春江町針原出土

仏教の思想に基づく火葬の風習が、わが国で行われ出すのは、仏教伝来より1世紀以上も後の7世紀後半頃と考えられる。文献の上では、文武4年(700)に僧道昭を奈良県粟原に火葬したのが初見である。この頃以降、火葬は、僧侶や官人層を中心に盛んに行われ、特に奈良時代には、金銅製の蔵骨器に火葬骨を納め、風水思想に基づいて南向きの丘陵上あるいは斜面に墓を営むことが流行した。

また、地方でも、急速に火葬は浸透したが、金銅製容器に代り須恵器の壺などを蔵骨器に転用することが多かった。

今回紹介する資料は、春江町針原の畑地から出土したもので、墳墓の立地からすればやや特殊である。須恵器の短頸壺を蔵骨器とし、器高15.5cm、口径10.3cm、胴部最大径20.0cmを測る。胴部下半外面のヘラ削り、内面のカキ目状のヨコナデ、外側に強く張り出した高台などが特徴的で、地元に生産地は求められよう。

これに口径14.3cmを測る蓋を組み合わせている。天井部外面中位にめぐる突帯は金属器模倣形態の蓋に影響を受けたものと思われ、これ自体特殊な用途を考えさせるものの、胎土・色調は短頸壺とは明確に異なっており、やはりこの短頸壺・蓋も寄せ集めの転用蔵骨器と考えた方がよさそうである。

（久保）

能面 筋怪士（すじあやかし） 〈購入資料〉

桧材　瞳金銅環、胡粉下地黄土彩色、裏黒漆塗
たて20.5cm×よこ14.5cm　（表紙写真参照）

神霊あるいは怨霊を表わす霊男のうちとくに亡霊などに使用されるものに怪士があるが、額のこめかみに静脈の筋をきざみ出しているものを筋怪士といい「船弁慶」の知盛などに用いられる。

霊男系の面の特徴として、眼に金銅の環をはめ、その左右に朱をさす、いわゆる「血ばしり」をもつ。

眼窩をくぼませ、観骨を極だたせ、思いきり頬の肉をそぐ。口をやや開き、上下の歯をあらわすが、唇に朱をさし、歯は漆箔とする。鬢、眉、髭の毛描きは細緻で柔かい。

面裏は、黒漆塗りで、「安シマ、助」と浅い刻銘をもつ。

本面の特徴はその作の優秀さもさることながら、面裏鼻の内側に十本と三本の鉋目（かんなめ）があることにある。一般に「知らせ鉋」といわれるこの筋目は、現在、越前出目家初代満照の細工印と考えられている。江戸時代の『面目利書』によれば満照の作の裏には、「鼻の上に竪に鉋目あり、細工印なり」とあり、また同じく作風として「細工一体麗敷上々作也。彩色至て細に柔に光沢あり」としていることから、本面は満照の作と考えられている。しかしこの「知らせ鉋」を同様にもつ奈良県天河大弁財天社の翁面に、「おちのきたろうきしん」と墨書があり、「おち」は大和南部の猿楽集団であるとして、その場合は出目満照のみの刻印というのは難しいとの説もある。

ともあれ、本面に関しては敦賀に伝えられたといい、越前出目家初代満照の作と認められている。今後は先述の刻銘の問題が残るといえよう。

参考　田辺三郎助『能面』小学館ブックオブブックス
中村保雄・杉浦茂『能面の美』図録 武生市教育委員会

（長坂）

郷土の人物シリーズ②

――刀匠越前康継（やすつぐ）――

両御所様被召出於武州江戸御剣作御
紋康之字被下罷上刻籠越前康継

世に「御紋（ごもん）康継」、また「葵下坂（あおいしもさか）」と呼ばれた越前康継の初代が、尾州熱田神宮に奉納した脇差の銘文である。この銘文により、徳川家康・秀忠両公の命によって江戸で鍛刀し、康の字と葵の御紋を賜わった事情がわかる。この時から彼は康継と名のり、幕府抱工としても活躍することになる。

初代康継は、下坂市左衛門と称し、近江国坂田郡下坂の出身と伝えられるが、後に越前に移り、結城秀康に抱えられた。この時期、即ち慶長期は日本刀にあって古刀・新刀の別がなされる時期にあたる。中世の鍛冶集団の中から、美濃鍛冶がその抜きん出た技術をもって全国に影響を及ぼすようになり、また戦国の世をへて、有力大名の城下に鍛冶が集中するようになったのである。68万石の御家門結城秀康の城下北庄にも多くの刀工が集まり、康継を筆頭として下坂鍛冶と呼ばれる集団を形成した。康継個人の技量のみならず、この優秀な下坂鍛冶に将軍家がねらいをつけたこと、秀康が家康の子であることなどが、上記銘文の事情に至らしめたと考えられる。

康継はまた「写し物」(模作）の名手としても知られる。正宗・貞宗など相州伝の作風を得意としたが、多くは姿と彫の模作で、刃文のみ康継独自の作風をしめしている。大坂落城の際焼けた名刀を再刃したことに影響されたのであろうか。

ところで康継作刀中の銘には、「以南蛮鉄」や所持銘が頻繁に表われる。当時輸入された南蛮鉄を好んで用いたものと思われるが、科学的分析により和鋼の方が良質とされ、南蛮鉄とともに入って来た鍛練技術に恩恵を蒙ることが大きかったとの説もある。また、所持銘は本多飛驒守（成重）が最も多い。成重は越前久世騒動の後、将軍家が越前松平家を補佐するために派遣した付家老で、康継の所持銘のある作刀中約半数を占めることから、彼の有力な後援者であったとみられる。

初代、二代を通じ隔年に江戸と越前で鍛刀すると伝えられるが、二代没後江戸三代と越前三代の両系に別れ、それぞれ後代まで続くことになる。（村野）

――ビデオライブラリーから――

真宗の村

和泉村川合は戸数12戸の小さな集落ですが、全戸真宗の門徒で、区の中央には大きな道場が建てられています。かって、毎朝毎夕、太鼓番のたたく太鼓の音を合図にむら中の人がここに集り、おつとめをしました。道場でのおつとめが、むら人の毎日の生活にリズムを与え、また規制していたのです。真宗の重要な行事である報恩講やオヒチヤは、今もむら人全員が道場に集っておこなわれますが、ここで中心になるのはお寺の僧ではなく、むら人の中から選ばれた「道場坊主」です。昔は道場坊主がお葬式もとりおこないました。

真宗では、地域ごとに道場と信仰の指導者を置きましたが、世襲の指導者をもった所では道場の多くが寺になりました。川合のように今も世俗の道場坊主がいるのはたいへん珍しいのです。

この番組では、これらの特徴や歴史を道場での行事をとおして紹介しています。

機を織る

今では見ることがなくなった手織機を再現、記録した作品です。戦前まで農村では、麻布が広く織られていましたが、木綿の持つ柔かさから綿を栽培し、布に織る人も少なからずありました。

この番組では、木綿をとりあげました。機にかけられた糸で、平織の布を織ることは、多少注意を払えば、そんなにむずかしいことではありません。

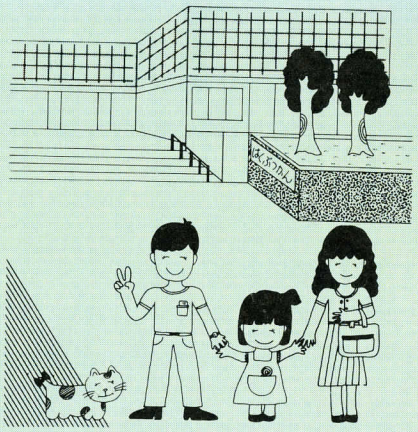
むしろ準備作業の方がはるかに、手間がかかりました。綿くり機を使って、綿の種を取り除く作業、ブンブン車を使う糸紡ぎ、染色さらに経台を使った整経、しんの疲れるアソビ通しやおさ通しなどの機を織る工程を紹介しています。リズミカルな機織りの音は、仕上げの喜びともいえるでしょう。

数十年前まで、日常の衣類は、自分で織り、縫ったものを使っていました。この番組で、染織の技術とともに、女達の生活の一端を理解していただければ幸いです。

昭和60年度友の会会員募集！…あなたもお入りになりませんか？

県民の皆さまに親しまれ、ともに歩む博物館をめざして、このたび福井県立博物館友の会（小・中学生はジュニアサークル）が発足しました。この会は、博物館事業の普及をはかるとともに、会員の教養を豊かにし、会員相互の親睦を深めることを目的としています。

この会の趣旨にご賛同いただき、会の発展のためにより多くの皆さまがご入会してくださるようご案内申しあげます。



会員になると

- ○博物館事業と友の会事業が事前に案内されます。
- ○博物館事業に優先的に参加できます。
- ○博物館常設展示を何度でも観覧できます。
- ○「ふくいミュージアム」が送付されます。

会員の期間

毎年4月1日から翌年3月31日までの1年間です。

会ではこんな事業を行います

- ○講演会、見学会などの例会を開催します。
- ○会報などの印刷物を発行します。
- ○博物館事業へ参加・協力します。

会費は（年額）

○大　人	3,000円
○大学生・高校生	2,000円
★ジュニアサークル 中学生・小学生	1,000円

入会の方法は

右の入会申し込み書にご記入のうえ、会費は次のいずれかで納入してください。

- ○直接博物館内事務局へ納入（申込書を添え）
- ○郵便局より振替で郵送（申込書は別に郵送）
- ○現金書留で郵送（申込書同封）

口座振替	
口座番号	金沢　5-23379
口座名称	福井県立博物館友の会

★入会の手続きが終了しますと、会員証をお渡しします。

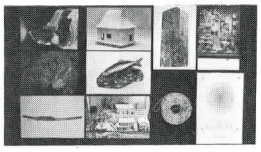
〈印刷物のご案内〉

友の会では、小中学生を対象にして、展示資料の一部をわかりやすく解説した「はくぶつかんミニガイド」と館蔵資料（10点）の絵はがきを発行しました。どちらも博物館受付にて販売しておりますので、どうぞご利用ください。

「はくぶつかんミニガイド」　¥ 100

絵はがき　1枚　¥ 50

1セット(10枚)　¥ 500



〈入会状況〉

昨年8月から募集を始めた友の会会員も、2月末現在168名（一般89名、小・中生79名）の入会があり、いよいよ3月24日(日)には総会が開かれます。

資料収集に御協力を！

ふくいミュージアム　No. 7　1985. 3. 1
編集　福井県立博物館
発行　福井市大宮2丁目19-15　〒910
☎ 0776－22－4675(代)
印刷　出口印刷株式会社